

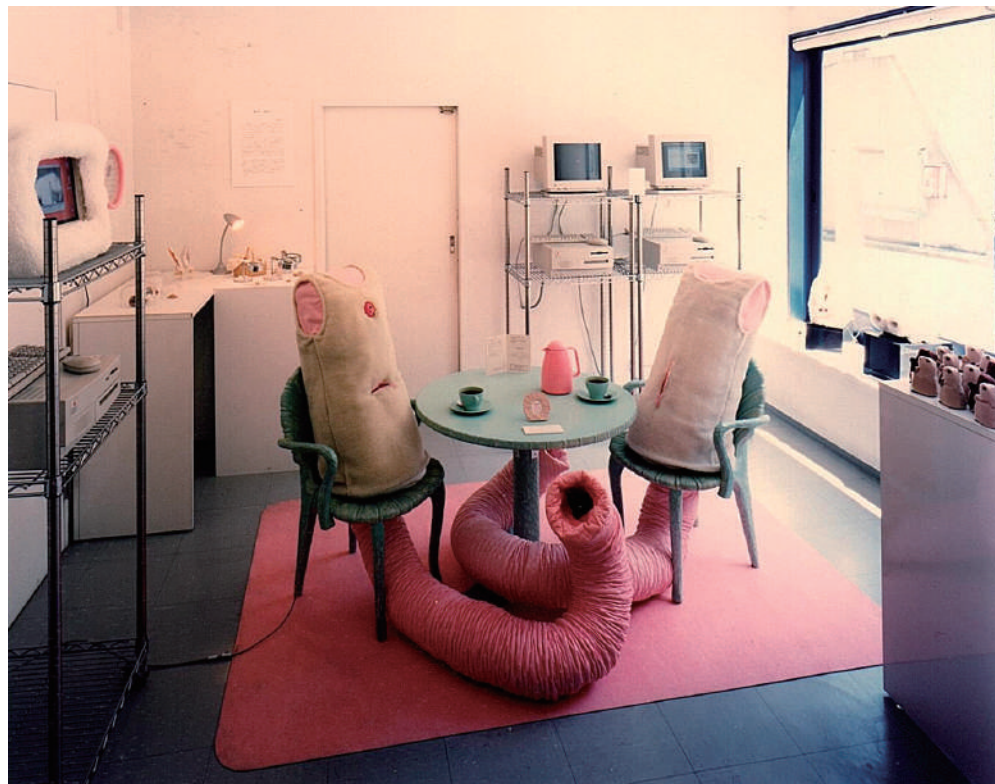
もとみやかをる調査ノート 神山亮子（学芸員、戦後美術史研究）

もとみやかをるが2022年末に急逝した後、近い人たちが残された作品や資料を整理してきた。筆者は縁あって調査を手伝い、彼女の関心領域の広さと、多様で多岐的な作品群を知った。初期のオブジェなど単体で成立する作品を別として、それらはインスタレーション形式の部分であるものが多く、またモーターなどの電動器具の故障や加工された既製品の変質等が散見された。作品の修復、あるいは再構成を試みる時は、例えばモーターの動きがどうであったのか、パーツがどのように空間に配置されるかなどを、記録写真や証言をもとに検証した上で、最終決定時には他者の推測や想像を加える必要があるだろう。作者の意図が（たとえ精緻な指示書があったとしても、おそらく）十全に展開される機会は、もはやない。作者を永遠に失うということの意味が実感させられる。

もとみやが、いわゆる美術作品を制作し発表した時期は、1990年代から2010年頃までの約20年間である。グラフィックデザイン、医学史や解剖学史の研究、茶道や花道など、もとみやの関心と専門領域は美術にとどまらず、このことが美術作品のコンセプトや表現形態の広がりに関係している。今回は、もとみやの美術作家としての活動の概要をつかむために、本人が作成したポートフォリオを基準とした。ただし、複数残るそれらには編集し直した形跡が見られ、いくつかのバージョンが存在し、ポートフォリオ自体が多岐的である。他の資料からできる限りの事実確認を行ったが、枝分かれする細部の検証は十分ではない。本稿は今後のもとみやかをる研究の進展を前提とし、上書きされるための調査ノートとして、記すこととしたい。

もとみやは1990年代から作品制作と発表を本格的化する。それ以前の活動については、1997年に刊行された『クリエイターズ・カフェ・ファイル』のインタビューが参考になる。（註1）大学時代に現代美術の状況に幻滅し、同時にグラフィックデザインの依頼が増えたため、10年ほどは美術から遠ざかっていたという。エディトリアル・デザイナー、グラフィックデザイナーの羽根多平吉のアシスタント経験を経て、もとみやは1980年代後半からグラフィックデザイナーとして活動していた。雑誌等紙面、本の装丁、レコードジャケット等のデザインワークが残されている。（註2）

1989年末に、もとみやは美術家の中ザワヒデキと出会う。（註3）中ザワはこの年の10月に『近代美術史テキスト』を刊行しており、（註4）翌年には医師から転身してイラストレーターとしての活動に専念、1990年代後半には現代美術の領域へと活動を移していくこととなる。1990年代初頭、もとみやと中ザワは「アロアロフサイ」として、パフォーマンスや展示などを行った。



1990年の年記がある、既製品を組み合わせて作られたオブジェが、もとみやの最初期の美術作品として位置付けられるだろう。（註5）蓋付きの箱を加工して厨子のようにしつらえ、流木やさまざまな物の破片などを収めてある。早逝した父への想いが込められ、内省的な雰囲気を持つ。

1995年の初個展から始まる「Rabbit Project」は、外の社会へと意識が向いた。翌1996年に、東京・渋谷のデジタローグギャラリーで個展「Rabbit Project」を開く。（註6）そこで展示された「Rabbition」シリーズは、白いフェイクファーでつくったうさぎのぬいぐるみに、モーターや模型などを組み込んである。毛皮のかたまりには開口部があり、手を入れると温かく、あるいは振動が感じられる。人工物が生命のような熱や動きを持ち、内部にあるはずのものが露わになる反転の衝撃がある。リボン、手提げバッグといった「かわいい」アイテムは一般に女性に帰されることが多く、機械（モーター）や科学を男性性に関連づけて対比させることも可能だろう。てらいなく社会風俗を取りこむ態度に、美術が拡張を続ける1990年代の時代性を読み取ることができ、またジェンダーの意識は、社会との関係から自己を定義する作業から派生したのだろう。うさぎという生物の生体（のモデル）を借りて、もとみやは自らの身体の外部との境界を問うたのだ。

「Rabbit Project」は1997年に、大阪と東京の3ヶ所のギャラリーでの連続企画に発展した。（註7）ウサギの着ぐるみを作者たちがまとい、乳母車に乗せた《Rabbition3号》を大阪、東京の会場間で運ぶというイベントも実行された。会期中に行われたパフォーマンスは、インターネット中継もされたようだ。人から動物への変身譚、都市への介入、最新のテクノロジーを用いた情報ネットワークへの関心など、さまざまな観点での読み解きができる。

これらの活動により、もとみやは1990年代後半のアートシーンで評価を獲得する。身体の境界を探る試みは、「身体観の変遷」というテーマを掲げて、医学史や解剖学史の研究において学術的にも探求されていた。この頃もとみやは、学会誌への投稿、標本作りや展示設計などを行っている。1997年に開催された東京大学博物館での特別展「プラスティネーションの拓く世界」では、もとみやは展示構成とカタログ執筆を担った。（註8）プラスティネーションは、当時注目を集めた標本技術である。

身体の境界を問い、外部環境への拡張を仮託する表現は、《内なる掛布》《内なるドレス》として、また、プラスティネーションの形態を借りたシリーズに結実した。これらは2000年に、当時、東京・青山にあったミヅマアートギャラリーでの個展「被膜の領域（Trace the Skin）」に出品されている。（註9）前者は、マシュマロと捕鳥網を用いて人の内臓の表面積を視覚化し、それらがベッドや枕（DMでは人体）に被さり広がった状態は、身体の内部と外部環境を鮮やかに反転させるダイナミズムを持つ。後者は、腕や髪の毛、爪など身体の一部を輪切りにして標本のように置いた作品で、関連して、自身の身体の同じ部位を撮影したセルフポートレートも制作された。

2000年代に入るともとみやは、積極的に海外で活動するようになる。ポートフォリオによると、最初の滞在制作の成果として発表した作品が、《California Lemon Sings A Song》(2000年)である。(註10)

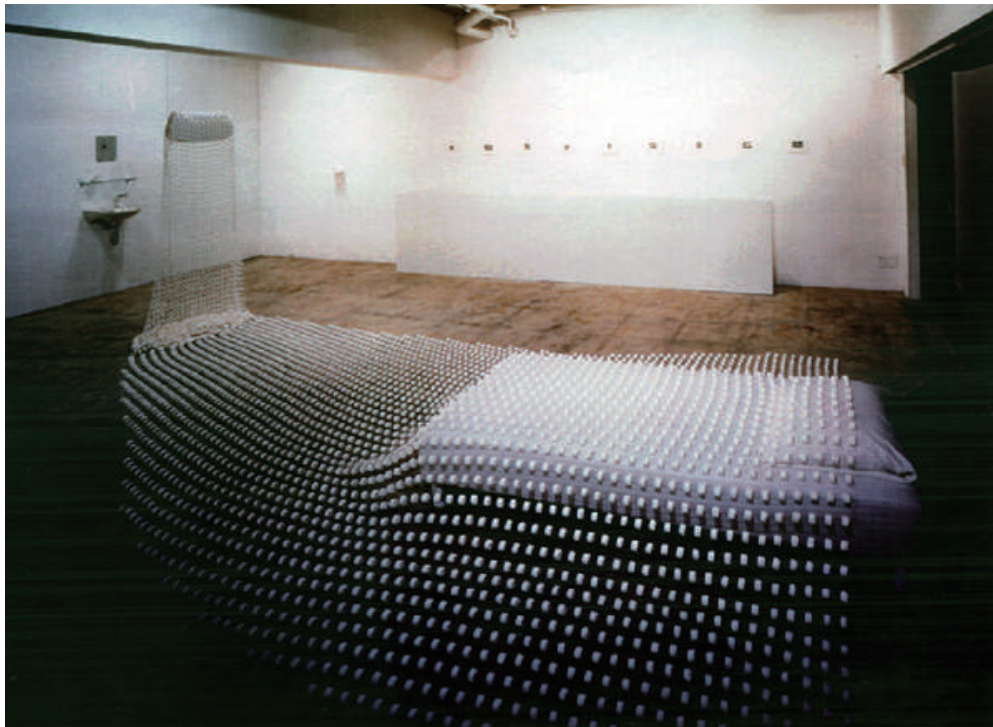
もとみやは、ある土地に一定期間滞在して制作するアーティスト・イン・レジデンスの意味を問い、結論として地域の特産品を使い、土地の特性を作品の形態に反映した。サンフランシスコで選んだレモンを酸性電池として用い、銅線をつないで音が鳴るサウンドインスタレーションを制作したのだ。ミサイルを形どったレモンの配置は、冷戦期のミサイル基地であった滞在所にちなんでいる。レモンはグローバル企業によって、日本をはじめ世界中に輸出される。もとみやは、レモンの使用を通して、またアーティストが移動して制作するというアーティスト・イン・レジデンスのシステムを介して、グローバル化が進む世界にコミットしたのだった。

オーストラリアと日本の関係に注目した《タスマニアのはなしを語る》にも、同様の視点を読み取れる。2002年のタスマニア滞在经过して制作された本作は、同年に日本のミヅマアートギャラリー(中目黒)で発表され、(註11)その後日本とオーストラリア間の交流展「Living Together is Easy」に出品された。(註12)両国間で木材チップの輸出入が行われている事実に端を発し、もとみやは都庁からタスマニア材の入った再生紙のシュレッドを譲り受け、張子のタスマニアタイガーを作った。タスマニアタイガーは絶滅種である。併せて、トイレトペーパーのロール7つ(都民1人あたりの1ヶ月分の使用量)を置くなど、木材が紙となり、リサイクルでさらに状態を変化させる過程に、タスマニアの森を重ねている。

もとみやは、2000年から2001年にかけてACCの助成を受け、また2002年から2003年にかけて文化庁在外研修員として、ニューヨークに長期滞在している。この時、スタジオの床の汚さに閉口して補修を試みたことをきっかけに、修復と再生というテーマが生まれたという。(註13)これはやがて、金継ぎという日本独自の修復技術を援用したプロジェクトに発展し、2005年のミヅマアートギャラリーでの個展や、2008年の広島現代美術館でのグループ展「シェルター × サバイバル」等で披露された。(註14)

金継ぎは近年はブームもあって普及しているが、もとみやの特徴は、陶器に限らず、家具や建物の床、壁に施して、新たな景色を立ち上げるところにある。また、かたつむりの殻や亀の甲羅など生物にも適用し、ものがそれ自体に宿す再生する力、その発動を促す行為として実行している。20年後から俯瞰すれば、9.11の前後、また日本では「失われた30年」とも名付けられる長い停滞の時期に生まれた作品であった。

ほかにも、1997年の個展に出品され、その後も発表される機会の多かった《よちよち歩き》、2002年に東京のICCで初めて発表した《Canon on the Table》、2005年にタイで滞在制作し、地元の子供たちとの共同制作も行ったプロジェクト、2000年代後半のヨーロッパでの発表など、言及すべき活動がある。今後詳細が明らかにされていくことで、新たなもとみやかをる像が立ち現れてくるだろう。



以上、もとみやかをるの活動の概要と作品の特質について記した。1990年代は、医学史や解剖学史から得られた視野を援用しながら、身体の境界を環境との具体的な接続において問うた。風俗や社会的事象を反射的に取り入れる態度、アイデンティティの探求という面は、1990年代の美術表現の語彙を持つ。2000年以降はグローバルな交渉への関心を、滞在制作で得たローカルな視点から作品化した。「修復と再生」というテーマのもとに、壊れた物や失われた風景を継ぐ行為は、20年経った今でも現在性を持つだろう。関心領域の広さと、いずれの領域にも精通する力が交わって、活動は多岐に展開した。このことの意味をどのように評価していくかが、今後のもとみやかをる研究の鍵となるはずだ。

(註1)「No.15 もとみやかをる うさぎにまつわるエトセトラ」『クリエイターズ・カフェ・ファイル』BNN、1997年、pp.98-99。

(註2)もとみやかをるの経歴については、中ザワヒデキが作成した年譜を参照されたい。

(註3)中ザワからの聞き取りによる。

(註4)中ザワヒデキ『近代美術史テキスト—印象派からポスト・ヘタウマ・イラストレーションまで—』トムズボックス、1989年。

(註5)《Lost Treasure》1990年、ミクストメディア。

(註6)「Rabbit Project」デジタログギャラリー、東京、1996年。

なお出品作の多くが共通するものの、1995年の展覧では「Rabbit Project」の語はまだ登場していない。

(註7)「Rabbit Project Tour '97 見えざるものの眺め (The View of the Invisible)」SAI Gallery、大阪/パナソニック・デジタル・アート・スクエア、大阪 / デジタログギャラリー、東京、1997年。

(註8)「特別展 プラスティネーションの拓く世界」東京大学教養学部自然科学博物館ほか、1997年。

24ページの展覧会冊子が刊行されている。

(註9)「被膜の領域 (trace the skin)」ミヅマアートギャラリー、東京、2000年。

ポートフォリオ記載のリストによると、《内なる掛布》、《内なるドレス》のほかに、プラスティネーションに似せた人体模型の作品6点、オブジェ2点、9枚組のセルフポートレイト写真が展示された。

(註10)《California Lemon Sings A Song》の初出は、Headland Center for the Arts、カリフォルニア、2000年。

(註11)「修復と再生」ミヅマアートギャラリー、東京、2002年。

(註12)「Living Together is Easy」水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城、2004年。「Living Together is Easy」ビクトリア国立美術館、メルボルン、2004年。

(註13)中ザワからの聞き取りによる。「床に包帯を貼って治癒させる」というような行為であった(中ザワ)。

(註14)「MOTOMIYA KAORU 2005」ミヅマアートギャラリー、東京、2005年。

展覧会評に、前田恭二「もとみやかをる 金継ぎで試みる『修復と再生』」読売新聞夕刊、2005年10月13日。「シェルター × サバイバル」広島現代美術館、2008年。

